

連携先世界遺産： 醍醐寺

上醍醐イラストマップをつくる

■受講生

鈴木彩乃乃（京都橘大学文学部4回生）・雨森泰良（京都橘大学文学部3回生）・大黒香織（京都橘大学文学部3回生）・月岡恵（京都橘大学文学部3回生）・青木万以子（京都橘大学文学部2回生）・東耕介（京都橘大学文学部2回生）・衛藤啓（京都橘大学文学部2回生）・福田響（京都橘大学文学部2回生）

■担当教員・TA

小林 裕子（京都橘大学・文学部・教授）・原祥子（京都橘大学大学院・M1）

活動目的・概要

目的：本学オリジナルの上醍醐イラストマップ作成

概要：本科目では「世界遺産醍醐寺プロジェクト活動を歴史遺産研究の立場からパブリック化する」というテーマのもと、世界遺産PBL科目発足時から、写仏用紙など拝観者の皆さまがより深く醍醐寺とご縁を結ぶ方策を考えてきました。本年はコロナの影響で活動期間が非常に短く、じゅうぶんな問題解決に至りませんでしたが、それでも活動を通じて我々自身も醍醐寺をより身近に感じる契機とすべく、取り組みました。その内容として、広く上醍醐を参拝者に知っていただくためのイラストマップ制作を掲げました。醍醐寺に到着した参拝者は唐門や三宝院、五重塔や金堂の佇まいに心を奪われますが、これら下醍醐から山を登ること1時間で上醍醐、そこからさらに奥の院まで足をのぼすと、あらためて醍醐寺の本当の姿を体感できる気がします。こうした上醍醐の空気に親しんでいただけるよう、あたたかみを期して手描きのイラストを軸としたマップを作成したのです。また、毎年のことながらお寺さまにお力添えいただき、社会人としていかに行動すべきか学生一人一人が考える機会になったかと思います。





活動の成果

LINEで打ち合わせを重ねながらのマップ制作

企画案

醍醐寺金堂や五重塔からさらに奥に進み、1時間以上登ったところが醍醐寺草創の地「上醍醐」です。そこには薬師堂、開山堂、如意輪堂などが木々に包まれながら静謐な姿を呈しています。醍醐寺最古の寺誌『醍醐雑事記』に先行して編纂されたという『醍醐寺縁起』には、理源大師聖宝が瑞雲に導かれて訪れた笠取山中で老翁の姿をした地主神横尾明神と出会った際に寺地を定めたこと、老翁が山中の清泉を飲んで「醍醐味なるかな」と言ったことが記されています。こうしたことから、上醍醐は醍醐という寺号の発祥地であり、寺のはじまりでもあることがわかります。しかし、上醍醐までの道程が山道であるため、参拝の方々に広く知られているとは言い難いところでもあります。ここに問題を見出しました。

本学における2016年の世界遺産PBL科目でも同様の問題提起をおこない、上醍醐を紹介するための地図や町石の位置を表示したハンディな「ほとけ手帳」を制作しました。今年度のPBLでは、上醍醐フィールドワークの際に偶然にも当時の履修学生が院生オブザーバーとして参加していたこと、そしてお寺さまから上醍醐の簡単な一枚ものの地図があったらというご意見がいただいたことから、上醍醐を参拝者の皆さまに手軽な方法で知っていただくためのイラストマップをつくることにいたしました。歴史遺産学科に所属する我々はふだんから歴史や考古遺物、美術工芸品に親しんでいるため、こうした知識を生かしたマップ制作を進めています。

活動成果

今年度の履修者は2回生から4回生までの学部生8名で、院生TAが1名参加しました。コロナの影響で前期がリモートであったため、まずは各自醍醐寺のご寺宝をテーマにレポートを執筆して準備しました。後期は、醍醐寺と同様に平安時代に開かれた仁和寺でお寺さまにご案内いただくプライベートツアーに参加し、困難な状況下でのさまざまな取り組みを実感しました。そのうえで、醍醐寺で仲田先生、飯田先生にご講義をいただいてフィールドワークを実施し、「問題」を見出そうと活動してきました。

しかしながら前述のように問題解決の「解決」部分に時間が割けず、さらにはコロナの再流行で履修者全員が集まる打ち合わせもじゅうぶんにできず、マップ制作は難航しました。現在もマップは完成に達したといえず、参拝者の方にご意見をいただくこともできておりません。本学における世界遺産PBLの到達目標は「学生個々の様々な能力を養成し、予測困難な時代に活躍できる人材育成」であり、本来であれば今年度のような状況でこそ臨機応変に対応せねばならなかったと思います。

【活動内容】(履修者共通内容のみ)

- 前期 自主学習 KT-note経由でのレポート提出
- 09.30 学内ミーティング「科目説明と日程調整・前期提出レポート評価」
- 10.11 仁和寺特別拝観
- 10.18 全体トレーニング「コンソ企画 ZOOMを使用した遠隔講義」
- 11.14 醍醐寺での課題発見、調査計画の立案のための事前調査
ご講義(仲田順英師)・下醍醐フィールドワーク(三宝院・霊宝館など/飯田俊海師)
- 11.15 醍醐寺での課題発見、調査計画の立案のための事前調査
上醍醐フィールドワーク(飯田俊海師)・夜間拝観(飯田俊海師)
- 11.18 学内ミーティング「課題決定と作業分担打ち合わせ」
- 12.13 成果発表会 キャンパスプラザ・Zoom併用



活動を振り返って

東 耕介（歴史遺産学科 2 回生・PBLリーダー）

今年は新型コロナウイルス感染症の影響で、大学はリモート授業が中心になるなど大きな打撃を受け、本科目も本格的な活動が10月からとなり、例年に比べ遅れてはじまりました。また、活動については感染症対策を徹底した上で行われました。

私たちは上醍醐マップを作成しましたが、作業は対面での会議をできるだけ行わず、コミュニケーションアプリを使って仕事を分担するスタイルを取りました。ここから私が学んだことは、文字だけでやり取りしていると、どこかのタイミングで伝え間違いや勘違いが起こってしまうことです。勘違いしたままですと時間も手間も無駄になることを痛感し、いかに改善すべきか悩みました。また私は、やるべきことをうまく分担できないと自分で背負いすぎてしまうことがあり、これをしてしまうと結局時間がかかり、出来は中途半端ということも経験しました。そうならないためにも積極的にコミュニケーションを取り、すべきことを整理しつつメンバーで分配するという、一見単純なことこそ重要と実感しているところです。これらのことは、遠隔での作業が増えることが予想される今後の学校生活や社会に生かしていける学びであったと考えています。

また、醍醐寺でのフィールドワークや上醍醐マップに情報を集約する際、メンバーそれぞれの視点や得意分野が異なることから、皆で学びを共有しあう喜びや、より広く深く物事を捉える楽しさを知ることでもできました。醍醐寺の皆さまには大変お世話になり、ありがとうございました。

いつまで続くかわからないコロナ禍で、歴史遺産の世界にもすでに多くの変化が起きています。例えば仁和寺では三密を避け、少人数の参拝者をお寺さまが解説を添えながらご案内くださるプランがあります。このことから私たちは大きな時代の変化の中にいると感じています。変化に臨機応変に対応できる社会人になるべく、今回学んだことを糧に努力していきたいと思います。



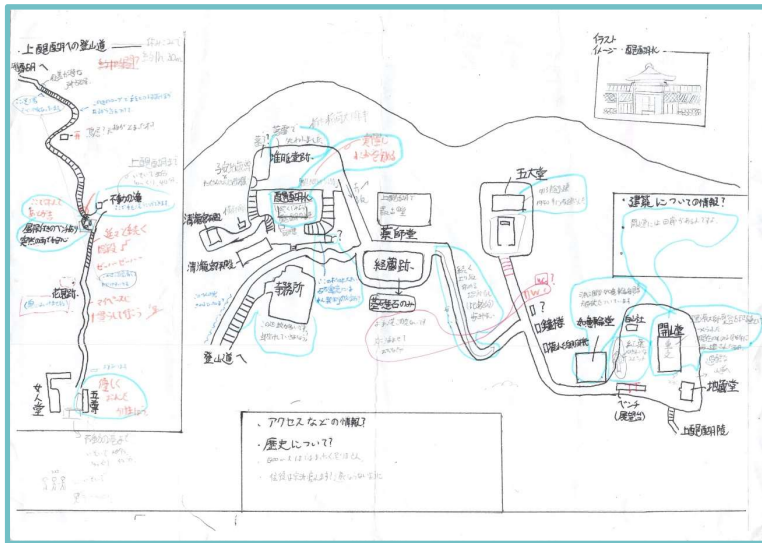
担当教員からのコメント

小林 裕子

本年はコロナの流行によって世界中が未曾有の危機に直面し、誰も経験したことのない困難を乗り越えねばならない状況が続いています。こうしたなかで、醍醐寺様、コンソーシアム京都関係者の皆様におかれましては、変わらず本学のPBL科目にご指導ご協力を賜りまして誠に有り難うございました。学生にとっても、制限の多い活動のなかで学外でいろいろな方と接し、ご指導をいただく機会を経て、将来社会で活躍していくにあたって何が重要なのかひとりひとり考えてもらえたのではないかと思います。実際の活動期間が非常に短く、じゅうぶんな問題解決ができたとはいえませんが、美しい紅葉に包まれながら山道を登り、上醍醐でお堂の扉を開けていただいて仏さまのお姿を拝した時の新鮮な感動を生涯忘れないのではないのでしょうか。その感動が多くの皆さまに支えられながらの経験であったこと、履修者同士で声掛け、協力しながら活動したこと、これらの意義深さに諸君がいつかPBLを振り返った時に気付いてくれればと願うばかりです。

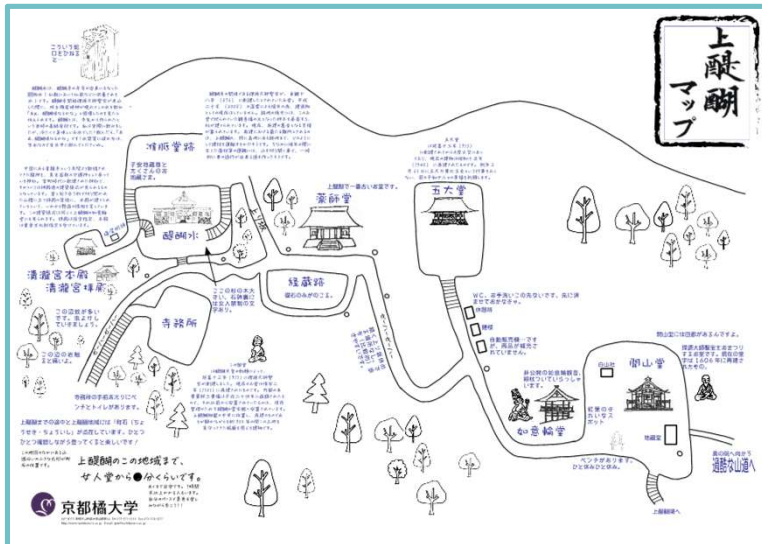


活動資料



皆でフィールドワークを思い出しつつ、また2016年に上醍醐の「ほとけ手帳」を制作した先輩から譲っていただいた資料を参照しつつ、地図に情報を書き入れていきました。

参拝の皆さまが手軽にダウンロードして入手できるよう、データサイズが大きくなりすぎない普通紙に単色でプリントアウトすることを想定したマップにすることに。



つつい読みでしまう近鉄の「てくてくまっぷ」をお手本に手書き風の情報マップを目指しました。

フィールドワークから発表会までわずかな期間しかなく、なかなか完成に至りませんでした。左の3種類のマップは試行錯誤中の状態です。どのように完成するでしょうか。

